

# 絶望化計画【ダンガンロンパV3】

Y 将軍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もし〇〇〇が黒幕だつたら…という小説まとめです。

黒幕妄想なのだあ！↑

「うふふふふふふつー口ボットにだつて計算すれば心ある発言が出来  
るんですよ？」

「才囚学園では俺がルールなんだよ」

「君らの生体……。しつかり観察させて貰つたヨ」

「ゴン太はね…モノクマを支える紳士になりたいんだ」

「超高校級の発明家である入間様だぞ♥？」

「ごめんなさい。私は主人の依頼を守らなければいけないの……許し  
て」

→の6人が多めです。

勿論、大量のネタバレ大豊作です。

ロボットとテニス選手  
ロボットとテニス選手

2 1  
目

3 1  
次

## 口ボツトとテニス選手 1

【キーボと星竜馬が黒幕だつたら】

※4章までの生存メンバーがいます。

　　真の黒幕さんは死んでます w

「ボク／俺が首謀者だよ。」

その声と共に、モノクマの周りから煙が出てきた。  
煙はどんどん広がつていき、モノクマの姿が見えなくなつた。モノ  
クマは消えながら

「うふふふふふふ……。いよいよ、おでましだね！」

と言つた。

そして、だんだん煙が晴れてくる。

晴れたあと、モノクマがいた場所には、今まで学級裁判をしてきた  
キーボと東条によつて殺されたはずの星竜馬が、モノクマが座つてい  
た椅子に座つていた。

いつの間にか、椅子はふたつになつており、白い椅子には星竜馬が、  
黒い椅子にはキーボが座つていた。

二人の目は左目が赤くなつており、キーボは胸辺りに、星竜馬は左  
頬の辺りに『絶望』という赤い文字があつた。

「う……嘘……でしょ？」

超高校級の探偵である最原終一は驚きながら、その場に立ち尽くし  
ていた。

「嘘……うふふふっ！ 最原クン！ 君はこの現実を、嘘と偽るのです  
か！ 実に絶望的な思考ですね！」

キーボが見たことのない笑みで、笑つた。

まるで純粋にこのゲームを見て楽しんでいる子供のようだつた。

「おい……星……なんで……なんでお前がこんなことを!?」

百田がバンツーと裁判台を叩きながら、叫ぶ。

星竜馬は「…………クスツ」と小さく笑うと、

「…………フツ、百田。俺に生きる意味を与えてくれたんだ。このゲー

ムの首謀者になることで、俺の生きる意味を…俺の大切な存在をつくることが出来たからな」

と不適な笑みを浮かべながら答えた。

「…………ねえ。キー坊…？星ちゃん…？…どういうこと？」

超高校級の總統、王馬小吉は戸惑いながらふたりに言う。

「ふう…。アンタらは、バカなのか…？この状況でまだ察していないのか？」

星竜馬は飽き飽きしながら言つた。

「…………まあ、改めまして自己紹介をした方がよさそうですよね…」

キーボは手をパンパンと叩きながら言つた。

「ボクは超高校級の絶望<sup>ロボット</sup>、キー<sup>ボ</sup>。」

「…………超高校級の絶望<sup>テニス選手</sup>、星竜馬。」

「ボク／俺らが首謀者<sup>黒幕</sup>の正体だよ！」

二人は手をお互い握りながら言つた。

そして、少しの間沈黙が続いた。

それを破つたのは夢野だつた。

「こんなのは嘘じやーだつて星は…あの時死んでいたでは無いか！」

泣きながら夢野は言う。

その姿を見て、二人は顔を見合わせる。

そして、「うふふふふふふふふふふふふふ…」

とキーボが笑いだした。

「夢野サン…あれぐらいなら、偽装すればいい話なんですよ……。そんなことで泣くなんてほーんとにバカですね！あつはははははつ！」

## 口ボツトとテニス選手 2

「さてさて、皆さんが絶望したところで、ボクらの真の目的を話しますよ。」

どこからか眼鏡を取り出し、クイツと眼鏡を上げながらキーボは答えた。

「真の…目的…？」

「俺らをコロシアイさせた理由か!?」

最原と百田が一人に聞く。

「うふふ…。落ち着いて落ち着いて。眞実は逃げないんだからさ。」

ケラケラと笑いながらキーボは答える。

「じゃあ話すね。君らは…」

「…んあ？」

「…んでもない殺人を犯した囚人たちなのですよ」

「殺人を…犯した?」

夢野、春川が続けて答える。

「ああ。アンタらは本来死刑レベルの殺人を起こした囚人なんだよ。

春川は穴埋めで見つけてきたんだけどな」

モノクマを抱えながら、星竜馬は言う。

「君らは本来、処刑される筈の囚人だつたんだ。でも、普通に処刑されるのはつまんないなーって思つてたんです。だ・か・ら……。君らにも殺される側の人間の気持ちなつてみたら、どうだろう…って思つたのです。だから、ボクと竜馬で考えたのです。ダンガンロンパを利用して、生き残つた人だけ、ボクらの手で葬ろうと!」

「俺とキーボは元々、兄弟のような存在だつたからな。この計画に俺はすぐに賛成した。今まで監獄にいた辛い思いを…殺人を好意でやつてるものたちを簡単に殺したくない……。なら、精々足掻きに足掻いて、最終的に絶望した顔で死んでくれれば、絶望的に興奮するんだろうな…って思つちまつたんだよ」

「うふふふ」と小さく笑いながら、星竜馬は答えた。

「僕たちが…犯罪者…?」

その場に崩れながら最原は言う。

「嘘じや…そんなの嘘じや!」

泣きながら叫ぶ夢野。

「それだけのために俺らの命をゲームとして扱つていたのかよ…！」

拳を強く握りしめながら顔を俯かせる百田。

「あははっ…。やつぱり皆、嘘つきなんだね」

小さく笑いながら、倒れる王馬。

それらの光景を見ながらキーボと星竜馬は、笑つていた。

「やつと、絶望してくれたつて感じですか?」

「……そう簡単に絶望しちまうんだな。」

椅子に座りながら笑うキーボ。

少しつまらなさそうにその光景を見ている星竜馬。

しばらくの間、裁判所は水を打つたように静かになった。その沈黙を破つたのは、星竜馬が抱えているモノクマだった。

「ねえねえ。結局オマエラはどうするの？ここで、ただ単に絶望しているだけなの？」

「確かにそれもそうですね。君たちはこれからどうするのですか？ここで絶望しながら暮らすのですか？」

「それとも、外の世界に行つて俺らに処刑されるか…」

「「投票してください／しろよ」」